

『熱中症と生物多様性とガリガリ君』の関係



みなさん、大変な時代になってまいりました！
なんと7月に熱中症で病院に運ばれた人が1万7680人！もいるとのこと。

『最近、ガーガー鳴くアブラゼミが減って、シャンシャン鳴くクマゼミが増えたよな～』なんて話をよくしていますが、工事業の観点から言うと『最近、ガーガー鳴くアブラゼミが減って、ピ～ポ～ピ～ポ～鳴くサイレンゼミが増えたよな～』といったところでしょうか？明日はわが身ですから、十分な睡眠、深酒をしない体調管理、こまめな給水、塩分補給、Tシャツの着替えなどの実施よろしく願いいたします。

しかし最近、パトロールを実施するにつれ、今夏の熱中症問題が引き金になったのか、どこの工場でも熱中症対策があらかじめ施されていることが多く、我々作業者としてもとてもありがたく感じることも多く、『みんなで安全を確保していこう元年！』という、請負契約を超えた人道的雰囲気が出始めている様な気がします。

40度近い現場で、防塵服、マスク、ゴーグル、安全帯を完全装備し、数々の書類に確認サインし、養生し、安全対策し、やっと作業が開始できる。毎年、事故のたびに増え、厳しくなっていくルールを遵守しながら、現場を無事故無違反で毎回終わらせていくには、作業責任者の責務と言うものはあまりに重くなりすぎてきており、それを工事責任者、下請けの経営者、元請の安全担当者、発注者である工場サイド、すべての安全にかかわる人達で安全の網を掛け、現場の負荷を軽減していこうとする流れではないかと思えます。

漁師の世界では昔から、『いい漁場を探すにはいい森を探せ』といったような表現があったそうです。森林が腐葉土をつくり、その土にしみこんだ雨水は鉄成分などを吸収し、魚介類の餌となるプランクトンを育てる栄養豊富な水になります。この水が森から川に伝わり、海に流れ込むことによって生命の溢れる豊かな海になるそうです。



『すべてのことは連鎖している。』

この考え方が、生物多様性の問題にも安全の問題にも言えるのではないかと思います。
たとえば、現場で何かミスが発生したとします。単純なミスです。机上の会議では『なんで～しなかったんだ！～しておけばよかったのに。これからは～しよう。だから対策は～だ。』となります。しかし安全多様性の観点から考えると『何が連鎖してるんだ？上流まで辿って行って、それぞれの場所で何が起きているか調べよう。それぞれが～しておけばよかったのか？これからは～しよう。だから対策は～だ。でもちよつと待て。その対策を実施すると逆に現場でどんな負荷が増えるかも考慮しよう。新たな負の連鎖の可能性もある。』
ここまでで机上の会議終了。

ここから先はフィールドワーク。
『自分の責任として、この安全対策を決めたが、これは果たして現場で実際機能するのか？時間、コスト、作業者の負荷となって新たな問題が生じないか？それを知るためには現場に出る必要がある。半日ではだめだ。丸一日自分に負荷を掛けて考えてみよう。もちろん保護具もウザくて重いけれどみんなと同じ完全装備だ。同じ条件で臨んで自分の中にヒューマンエラーの根源を探してみよう。サウナで10分我慢して、5, 4, 3, 2, 1, GO～で外に出るとき、座っていた場所のタオルをきちんと次に使う人のために直せるか？サウナの温度が下がらないように扉を最小限に開けて退出できるか？それを思わず忘れてしまうのがヒューマンエラーだ！』

私の単独安全多様性会議COP10ではこんな自問自答が繰り返されております(笑)



人間の頭蓋骨の中には3種類の生物が生存していると言われています。
人間(大脳新皮質)、哺乳類(大脳辺縁系)、爬虫類(脳幹・視床下部)です。
机上の理論は大脳新皮質で考えられ、作業者に同情し同じ負荷条件を自分に課してみようという試みは、群れで行動する性質のある哺乳類脳で考えられ、過剰な負荷が課せられたときに自分を守ろうとする行動(ヒューマンエラー)は、生命維持の役割を担っている爬虫類脳から発せられます。
3種類の脳をよく理解し、バランスよく機能させ、安全多様性の問題に取り組む安全マンが今求められていると思えます。

感謝！

羽原篤史



P. S. 先日、安全パトロールに『ガリガリ君』を持っていきました。
作業者の皆さんの哺乳類脳が瞬間的に『やった！』と反応し、暑さでへばっていた爬虫類脳が復活し、大脳新皮質にやる気のホルモンをバンバン送り出していました！！
『ガリガリ君』は連鎖します。全国で生産が間に合わないというニュースになっていましたが、うなずけます！！

